

---

# 同じ空の下

柚真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同じ空の下

### 【Nコード】

N6247A

### 【作者名】

柚真

### 【あらすじ】

彼氏に突然告げられた別れ話。彼の夢のためならしょうがないかもしれないけど…

私、アイノチサ藍野千砂には彼氏がいた。

フジノミナト富士野湊。成績も良く運動神経もいい私の自慢の彼氏だ。

今日は湊と付き合って1年の記念日だった。そんな日に私は衝撃的な言葉を湊から聞かされた。

湊と約束をして私達は学校帰りにデートをしていた。

映画を見てお茶をして楽しく会話をしていた。

そして帰り道、近くの公園に寄った。

「今日は楽しかったね。またあのお店行こうね！」

湊はなぜか元気がなくうつむいていた。

「湊…？どうかしたの？」

湊は急に改まって私のほうをじっと見た。そしてとんでもないことを口にしたのだった。

「あのさ…千砂。俺と別れて欲しいんだ。」

「……え？」

ついさっきまで映画を見てお茶をして楽しく話して

それなのになんでいきなりそんなことを言い出したのか私にはわからなかった。

目の前が真っ暗になり言葉が出てこなかった。

「別に千砂がいけないとかそういうことじゃないんだ。俺…北海道に行くんだ。」

「北海道…？」

「うん。親が転勤になって北海道に行くことになったんだ。」

湊の親は転勤が多くこの町にも3年ほど前に引っ越してきたのだった。

「湊もう高校生だよ？1人暮らしとか…」

「俺が星について勉強してるの知ってるよな？北海道は星の勉強をするのに1番いいところなんだ。」

湊は将来星関係の仕事につきたいとよく言っていた。それほど星がすきなのだ。

「でっでも北海道に行くからってわかれることないよね？」

私の目からは涙がこぼれてきた。

湊は静かに首を横に振った。

「千砂にはこっちでの生活があるし俺にはあっちでの生活がある。遠距離だと千砂も嫌な思いをたくさんすると思う。だから俺たちは別れた方がいいんだ。」

そういつて湊は私の涙をふいた。

「千砂は笑っていてよ。もう俺のことは忘れてくれていいからな。」

「そんな…」

湊はじっと私を見ていた。これはもう決めたからという合図なのだ。

今まで湊は一度決めたことは絶対に曲げたりしなかった。

もう湊が決めてしまったんならしょうがない。そう自分に言い聞かせた。

湊の邪魔をしなくなかったからだ。

「出発は明日なんだ。家族はみんな先週出発してるんだけど俺だけ明日にしてもらったんだ。今日はたいせつな日だから。」

そういつて湊は私に持っていた紙袋を渡した。

「あしたは学校だから見送りはいいよ。…元気でな千砂。」

そういつて湊は家に帰っていった。

そして次の日、湊が北海道へ出発する日。

私は布団から出ることが出来ず学校も休んでしまった。

そういえばと思い昨日湊にもらったプレゼントを開けてみた。

すると中にはきれいな星のネックレスとメッセージカードが入っていた。

【ずっと笑っていてくれよな。そして俺なんかよりいい彼氏を見つけてるんだぞ。】

そのカードを見た瞬間私の目からボロボロと涙があふれてきた。

湊の夢は邪魔したくないでも…湊のことは好き、離れたくない！

そして私は布団からがばっと起き上がると仕度をして家を飛び出した。

自転車を思いっきりこいで近くの駅に着いた。ホームにはもう電車が来ていた。

電車の中を探すと湊の顔が見えた。

「湊っ！」

湊はびつくりした様子で電車の窓を開けた。

「湊の馬鹿！湊よりいい彼氏なんているわけないじゃん。私は湊がいいの。本当は別れたくない…。」

「千砂…。」

千砂の目からは涙がこぼれていた。

「ごめんな。離れ離れになるくらいなら別れた方が千砂のためだつてずつと言い聞かせてた。でも違ったんだな。いくらになれていたって今は電話もあるしメールも出来る。俺千砂の気持ち考えてるつもりでもまったく考えてなかった。」

「ううん。」

千砂は首を横にふった。

「私毎日電話する。メールもする。手紙も書く。だから湊も私のことと忘れないでね。」

湊はクスッと笑って私の涙をふいた。

「忘れるわけがないだろ。」

そついうと電車が走り始めた。つられて私も走り始めた。

「いいか千砂、俺たちは決して離れ離れになつたりはしない。だって同じ空の下にいるんだからな。」

「うん！」

「千砂元気で！ついたら電話するからな。」

そついうと電車はホームを出て向こうの方へ消えていってしまった。

私は涙をふいてにこつと笑った。

寂しくなんかない。だって同じ空の下にいるんだから。



（後書き）

なんかちよつと展開が早すぎるのかも知れないですね・・・  
一応初投稿作品です！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6247a/>

---

同じ空の下

2010年10月9日23時17分発行